

140字の雑記帳

紺屋淳之介

第一期

(2010/7/7-2010/7/22)

ついのべ～彼方～

2010/7/7

牽牛と織女の夫婦は、今年もきっと逢瀬を果たすことだろう。
いくら雲が厚くとも、その上は満天の星空なのだから。
今日は早く仕事が終わるから、僕も少し幸せのおすそ分けをもらいに、
いつもの街へと出かけようと思う。気付いたら今まで鵲役ばかりだった僕。

2010/7/7

いつも人前で明るく振舞う生き方をしているからこそ、
女性の薄幸な表情に惹かれる僕がいる。
幸せにしたいとかじゃなく、そこに深い闇を見るから。
心の暗がり、だからこそ妖しく、美しい。
好きだった女性の事は、もう思い出すこともない。
でもきっと、美しいひとだったのだろう。

2010/7/8

電車を降りる僕、乗ったままの君。
少し遠回りだけれどもこの駅で乗り換えるのは、
君と話したいからだけじゃない。
君は知らないだろうけれど、
去りゆく電車の音に紛らわすようにいつも言ってるんだ。
「ありがとう」って。

2010/7/8

魔法が当たり前に見えるこの世界では、
人の記憶も実に簡単に書き換えられる。
例えば君と別れたら、君との思い出も
綺麗さっぱりなくしてしまえるんだ。
そうやって僕たちは何度も何度も恋に落ち、
同じ過ちを繰り返してる。
なんだ、魔法が使えないはずの君たちも、
畢竟同じじゃないか。

2010/7/8

小さな祠があった。

まだ子供だった神様は、上がってくる水嵩を最初、嬉しそうに眺めていた。

徐々に水面は膝を超え、胸、そして肩までやってきた。

神様は怖くなって村人を呼んだが、その声は届かなかった。

今やダムに沈んでしまった神社で、神様は来ない人々を待ち続けている。

2010/7/9

眠る前の一本のタバコは彼の日課だ。

ベランダから夜空に吸い込まれていく紫煙を眺めながら、
何を考えるでもなく、ぼんやりとした感覚に身を任せる。

まるで悩みや苦しみが一緒に空へと流れていくようで、
残った彼は空っぽになれるのだ。

日々の辛さを吸い込む空は大きく、果てしない。

2010/7/9

だだをこねて無理に着てもらった浴衣姿に、初めて手をつないだ夏祭り。
うれしさと恥ずかしさで、あたしはなんだか夕方から上手に喋れなかった。
帰り際、心配した君の一言が優しく、思わず寄り添って、キスをしてしまった。
初めての唇は、さっき食べたソースの味が少し、した。

2010/7/9

「私といると、あなたはいつも哀しそうな顔をしてるの。」
普段は悩みなんかないだろう、なんて言われてる僕の、
そんな本当の顔を知っている人はもういない。
君がいなくなってしまったから、僕は毎日微笑みを絶やすことはない。

2010/7/9

空港に降りるとまず、その土地の食事を摂るのがお決まりだ。
久々の欧州だから、濃いめのエスプレッソで11時間のフライトの疲れを癒す。
湿度地獄な東京では考えられない空を見て、
カウンターに立つ店員へ少しナンパな冗談を飛ばす。
日本語以外の言葉で話す俺は、案外開放的なのだ。

2010/7/9

乗り換え待ちの間に携帯を見ると、ついさっきの不在着信が。
何だろう。

夕方から強くなった雨の中、電車がホームに入る。

僕は画面から顔を上げ、ポケットにしまう。うん、急いで家に帰ろう。

2010/7/10

無数の真っ赤な鳥居が並び、先の見えない隧道のような空間。

迷い込んだ少女は、裸足でその道を行く。

「君は僕のお嫁さんになるんだ」

狐の面に浴衣姿の少年が、物陰からひょっこり顔を出す。手に揺れる提灯。

じき歩みを緩め、立ち止まると少女は女になり、狐は子供のままだった。

2010/7/10

雨の日だけれど、傘は差さない。

お気に入りの藤色のカーディガンが、ポツポツと水玉模様になっていく。

私もこんな風に、たまにはいつもと違う表情になりたいの。

特に電話が鳴らない、今夜みたいなさみしい夜には。

きっと髪がしっとりと濡れてしまうまでには、家に着いてると思う。

2010/7/10

昔、旅先で出会った女性からもらった石を、なぜか未だに持ち続けている。
白い表面には、油性インクで顔が描いてある。閉じた片眼からは涙の粒。
その石を見るたび僕は、あの冬の地中海を、
そして見知らぬ土地に少し怯えた様な彼女の姿を思い出す。
彼女は今、どこにいるのだろうか。

2010/7/11

「思い出は浄化されていく」なんて、誰かが言っていた。
けれども僕の記憶は、浄化されるどころかすっぽりと抜け落ちてしまっている。
君の顔を思い出そうとしても、朧げな輪郭だけで、
楽しかったはずの場所も、今は脚を向けたくない。
これが浄化だと、僕にはまだ思えない。

2010/7/11

私が大好きな海の碧は、きっと空の色を映しているのよ。
あなたが綺麗と言ってくれた私の瞳には、
他の誰でもない、あなたの姿が映っているでしょ。
新月の夜空の下では、海は漆黑になるの。

2010/7/12

仕事を辞めた。自分を見失いそうで、長野に引越した先輩の家に行ってみた。

「この冬、ヤマネを見たんだ。」

子供みたいな瞳をしながら写真を見せてくれたけれど、

それより私には先輩が、あの頃の夢を叶えていることが嬉しかった。

パートナーが私でないことは少し残念だけどね、先輩。

2010/7/12

僕は、僕自身を見ることができないから、
君に言われるまで、自分の瞳が鳶色なんだって知らなかった。
君と出会うまで、沈黙でも幸せなんだって知らなかった。
君は、僕の知らなかった僕を見つけてくれる。
僕は、君に何をしてあげられてるのかな。

2010/7/12

毎日スーツに身を固め、満員電車のなかでも冷房の真下を必死に守る俺。
けれど車窓から一瞬見える光景のように、
昔はTシャツを絞れるぐらいの汗で、灼けるようなグラウンドを走り回っていたのに。
夏が来るのが本当に待ち遠しかった。
いつからだろう、全力疾走していないのは。

2010/7/12

月のきれいな晩にはいつも、
少しばかりの薄雲が出ていて欲しいというのは贅沢だろうか。
ずっと同じ表情を見ているよりも、時折落とす影が美しいと思うんだ。
今、この瞬間、ここからしか見られない光。
不幸かそれとも幸運なのか、僕はカメラを持っていない。

2010/7/12

いつの日か結婚して、家を建てたら書斎が欲しい。
二階の角部屋で、そう、もちろん子どもたちはその空間に立ち入ることができない。
そして、十五の誕生日に鍵を渡して言おう。「今日から君の本はあの棚に置きなさい」
本は、人生そのもの。本棚を見れば、その人をもっと好きになる。

2010/7/13

帰り道。先頭車両の一番後ろ、二人掛けのシートの上で、私は今日も透明になる。
膝に抱えた本に目をとめる人はいるけれど、私という存在に気付く人はいない。
普段は名字で呼ばれてる私の休日の午後。
部屋に帰ると白いカーテン、少しの家具、そして机の上に小さな鉢植えが待っている。

2010/7/13

三つ下の後輩は、あの頃よりもずっと大人びていた。
いつの間にか化粧をする歳になっていたからだろうか。
学生時代はかわいい後輩としか思ってなかった僕は、不意の再会に狼狽えていた。
なんとかしてそれを勘付かせないように、白然を装って台詞を続けた。

ほんとうは、わたしは、彼と別れたことが、自然と気づいて、自然と別れた。

「もう、彼氏とかできた？」

2010/7/13

君が初めて部屋に来た時にかけたCD、それが総ての始まりだった。
あの街にいる君はきっともう、このバンドも、この曲すらも覚えていないと思う。
六年という時の間に、僕らの総ては終わってしまったから。
今、引越し先のこの街で、僕は一人そんなCDを聴いている。明日も仕事だ。

2010/7/14

革命だ、なんて叫んでいたパパが大人になって、
自分たちが血を流して作らせまいとした空港から、
娘のアタシと夏休みの旅行に出かける。
アタシには何が正しいのかはわからない。
でも今、アタシが愛と平和なんて言えるのは、
あの日、ネクタイを締めてくれたパパの大いなる転進のお蔭。

(ついのべの日。お題「革命」)

2010/7/14

もう随分経った。一眠りしたらもう太陽の位置も分からなくなっていた。
冥王星を過ぎたあたりから、近くに広がるのは深い深い闇ばかりで、
真空の世界には音も聞こえてこない。
原子電池はあと134年と8か月は持ちそうだけれど、
その間の任務は当てもない電波を送ることだけだ。

2010/7/15

山間の誰も通らない道の上。

白い煙を上げるミニバンの横で男は電話を切る。

JAFが来るまで一時間半、

ついてないと独り愚痴を言い終わると、汗だくのまま煙草に火をつける。

煙を吐いて空を見上げた時、入道雲と、辺りを満たす蝉の声に気付いた。

男は、子供のような笑みに変わった。

2010/7/15

「髪切った？」って聞かないと、きっと君は不機嫌になる。
そんなことは知っているけれど、言ったら言ったでなんだかまるで、
君のことを四六時中見ているみたいじゃないか。
もし気付かなければ、こんな風に悩むこともなかった。
君の髪型の些細な変化と、僕の心の大きな変化に。

2010/7/15

「ねえ、うそ、なんでしょ。」微笑みながら君は言った。
たったそれだけの言葉で、僕は恋に落ちていたことを自覚した。
自分ですら信じ込みそうだった偽りの想いを、君はいとも簡単に見抜いてしまった。
言い淀む僕を、君はじっと見ている。
観念して僕は笑った。
君は嬉しそうに泣いた。

2010/7/16

自殺未遂の果て。

退院した私は、送ってくれたその足で彼の部屋に行った。

彼は何も言わず私の手を見る。「...小さい手」ゆっくりと口を開く。

「この手で、総てをこらえていたんだな。」

彼の声は震えてた。

彼を安心させたくて微笑もうとしたけれど、涙が溢れて、そのまま泣き出した。

2010/7/17

昔からこの地には、開けると願いが叶う箱がある。
その箱を手に入れるために人々は争い、多くの血が流れた。
けれど未だ誰も箱を開けたことがない。
「箱を開けたい」という最初の願いは、その箱の中にあるのだ。

(お題「何でも願いが叶う箱」)

2010/7/18

忙しかったから数カ月ぶりか。未明のハイウェイを走る。
街を抜け、灯りがなくなってきたと思ったら、
ラジオのあいさつはおはようになり、空が本格的に白んできた。
早く、早く。陽が上りきる前に。アクセルを踏む。
トンネルを抜け、辺りが明るくなる。助手席方向に朝日と海。

2010/7/20

改札でさよならを言った後、2番線のベンチで今日を振り返る。

「あれも減点、これも減点」

堂々巡りする気持ち、どんどん君に申し訳なくなっていく。

発車した瞬間、携帯が鳴り出す。

マナーモード、解除したんだった。急いで携帯を開く。

「ありがとう」僕は日々救われている。

2010/7/20

この国では、いくら暑くても日陰は意外と涼しいのです。
慣れない白ワインに火照った頬を冷まそうと、
海辺のオリーブの樹の下に腰かけてこの手紙を書いています。
手紙なんて珍しい、と笑っていることでしょう。
でも、僕は君にこの景色を見てもらいたくて、どうにもならないのです。

2010/7/21

この街には、風情のある地名が多い。
つい最近造られた人工の都市なのに、お役所ってやつもなかなか粋な真似をするもんだ。
夏も深まると、緑を抜けた風がコンクリートの上に心地いい。突
然の辞令を受けて東京を出たのが半年前、
単身赴任ってのは少し学生時代を思い出させる。

2010/7/21

自転車が悲鳴を上げる。あたしの体ももう限界。
こんな暑い日に出たくなかったけれど、
クローゼットから麦わら帽子が出てきたから。
家を飛び出して坂の上の公園を目指すあたし。
あなたには届かなくても、バカヤローって言ってやるんだ。
今日の雲なら、笑って聞いてくれる気がするの。

2010/7/22

桜と年度始まりに落ち着きをなくす頃。
僕も早出、飲み会の毎日にやられて、今週はもう前半の記憶がない。
帰宅後、半分動かない頭で携帯を開くと、見慣れないアイコンがあった。
留守録に君の声。「また一つおじさんになったね。おめでとう。」
僕より僕を覚えているね。ありがとう。

(#twnovelの一周年記念 お題「記念日」)

2010/7/22

夜中のドライブ、ハンドルを握るのは僕。
他愛もない話の端々に、幸せを噛みしめる。
ただ、こうやって君と出かけるのはいいんだけど、
大好きなその笑顔を見られないのは残念なんだ。
だから今夜は少しだけ、バックミラーを左に向けておいた。

夜中のドライブ、ハンドルを握るのは君。
音楽好きな君だけど、私を乗せてくれる時、
いつもラジオの音を下げていることも知っている。
あ、今夜はミラーを動かしているのね。
でも実は、オレンジ色の明かりの中を運転してる
君の横顔を見てるのも好きなんだよ、私。

のんぷいく ～此方～

2010/7/12

小学校の時。理科の実験で豆電球をつけた。

誰からともなくアイデアが出た。

クラス全員の電池をつないでつけてみよう、きっととても明るい光ができる。

クラスは一つになり、電球は粉々になった。

2010/7/13

数年前、学会で訪れた欧州のとある街の写真が出てきた。
小さい頃は学者になりたかったから、あの瞬間は僕の夢そのものだった。
卒業し、今は夢の向こう側にいる。
思いもしなかった道を進み始めて、随分遠くまで来てしまった。
昆虫が大好きだった少年は今、こんな人生を楽しんでいる。

2010/7/14

小さい頃飼っていたハムスターが、病に罹った。

そして徐々に弱っていき、ある日僕の掌に抱かれて死んだ。

それ以来、生き物を飼ってなかったけど、また何かを育てたくなった。

もう僕も大人だから、十分な環境を揃えることは出来るだろう。

でも、愛情を注げる余裕はないかもしれない。

2010/7/16

連休だと気付いて、ふと会おうかなと思った人が海外に出かけていることを思い出した。
やっぱり少し住む世界が違うから、なかなかタイミングが合わないな。
真っ青な空にそう呟いてみて、僕はさらにその人に会いたくなった。
夏は始まったばかりだ。

第二期

(2010/7/25-2010/9/9)

ついのべ～彼方～

2010/7/25

まだ僕が運動部だった頃。夏が来るのが今よりずっと楽しみだった。

どんなに暑くても、芝のグラウンドで飲むスポーツドリンクが、猛練習の辛さを忘れさせてくれた。

あの時僕は、翌日の試合で負けることなんて考えてもみななかった。

勝ち投手になって、君に告白するつもりだった。

2010/7/26

街灯に光る水溜りが、今日の雨の強さを唯一教えてくれる。
空にはもはや雲もない。降り始めの匂いは好きだけれど、止んだ後の空気は好きになれない。
何もかもを押し流してしまった筈なのに、雨上がりに決まって思い出す、遠い遠い思い出。
貴女と語らった言葉と、声と、甘い匂い。

2010/7/26

生きてると、心は少しずつ壊れてくみたい。

角を削り、時に二つに割れて、それでも粉々にならないように大切に抱えているけれど。

あの日、さよならと一緒に、私はあなたにその欠片を渡したけれど、もう無くしてしまったのかしら。

今は別々の道を進む二人は、もう会うこともないのね。

2010/7/26

会社との往復の毎日、淋しさなんか感じる暇もなかった。私はひたすらに、忙しさを装っていた。

でも、あの日出会ったあなたが、私のかりそめの平穩を壊してしまったのよ。

私の日常を変えてしまった責任を取って。今すぐ会いに来て。

できないなら、声だけでもいいの。

2010/7/26

「今日こそは」何回目だろうか。
心の奥には伝えたい思いがあるのに、いつも冗談ばかり言ってしまう。
でもヒロインが見せる笑顔は、彼にとって何にも代えがたい喜びだ。
「いや違う」彼は思う。
彼が本当に欲しいのは、もう一つの笑顔。
今日も道化は、喜劇と言う名の悲劇を演じ続ける。

2010/7/27

昔、田舎の本家には牛小屋があった。

まだ小さかった僕にとって、鼻息や蹄の音がする扉の向こうは、得体の知れない空間だった。

だから玉蜀黍の芯を与えようとしても、独りではできなかった。

何頭かいた猫たちは、暖かいのだろうか、夜になるとその天井に入り、眠っているようだった。

2010/7/27

煤けたガラス、陽に焼けた虫の死骸。

夏の終わりに毎年来たこの建物は、数年振りだというのに何も変わっていなかった。

しかしこの年月は僕を大人に変えた。

別れた人のことを聞かれても、「知りません」と一言僕は微笑んだ。

芒と月。残暑に喘ぐ下界と違い、高原にはもう秋が来ていた。

2010/7/31

気怠い煙の中で、僕は喋りかける。特に話題なんかないけど、ただ君の声が聞きたかった。君は無言のまま、僕をじっと見ている。君の目に僕はどう映っているんだい。ただの友達であり続ける安定と、それを踏み越えてしまいたい衝動の合間で揺れ動く僕は、薄くなった焼酎に口をつけた。

20107/31

赤くなった腕をさすりながら、ソファの上で時計を見ている。
いや、正確には焦点は時計にはなく、遠い彼方を眺めている。
考えているのはこの夏の日の思い出か、それともこれからの未来か。
やがて彼は意を決したかのように携帯を取り出し、メールを打ち始めた。
「今日はありがとう」

2010/7/31

花火の音に驚いた君は、僕の手を握りしめた。あれが初めて繋いだ君の手だった。
街は人で溢れ、離してしまうともう会えない気がして、少しだけ右手に力を込めた。
雪駄に慣れない君が歩きづらそうだったから、休もうと声を掛けた。
立ち止まって、僕と君は空を眺めていた。

もう昔の話。

20107/31

空から見る花火も、地上から見るのと同じ丸。
けれど、花火よりも綺麗なのは一つ一つの街の灯り。
あのどれかがきっとあなたが生きている証なのね。
あなたにも内緒で突然帰国した私。
着いたら電話をかけて驚かせてみようかしら。
東京上空を旋回した機体は、そのまま成田空港へ向かう。

2010/7/31

あなたの私への想いは知っているよ。
けれどそれを口に出してくれるまでは、私はそんな素振りは見せてあげないの。
今日だってあなたは、たった一言、そのチャンスを逃してた。
いつまでも待っているわけじゃないよ。
だって、このままじゃ私から、そのセリフを言ってしまうそうだから。

2010/8/6

東京で育った僕にとって、夏とは、溶けかかったアスファルトや、ビルの合間に見える入道雲だ。
森の中の涼しさや夕立直前の土の匂い、川の流れる音、
そんな光景があった学生時代を過ごした町は、もう遠い夢のような存在になってしまった。
彼女と過ごした暑い日々の思い出とともに。

2010/8/6

突然スイカを丸ごと買ってきたあなた。楽しげに切ってくれた八分の一は、私には少し大きいよ。

この前買った風鈴は静かだけれど、昼下がりのベランダでかじる夏は、なんだかとても嬉しかった。

お代わり。

立ち上がろうとしたあなたは、私を見て、多かったか、と照れくさそうに座った

2010/8/13

ヘッドホンからはお気に入りのロック、ここは流れる都会の交差点。
夏の邪悪な太陽が、ジリジリと僕の肌を焦がす。
携帯を片手にハンカチで首筋を仰ぐ男たちと、
ビニール袋を片手に喋るOLの群れが、絶え間なく視界を横切っていく。
とあるPVの一場面が、眼前に繰り広げられている。

2010/8/13

皆変な顔をするけれど、僕は夏だから黒い服を着ている。

黒は光を吸収する色だからこそ、大好きな季節の総てを身体に刻み付けるんだ。

熔けるような蝉の声が少しずつその種類を変えていく中、僕は炎天下の街を今日も行く。

2010/8/13

9回裏。絶望的な点差を前に、背番号4は打席に立っている。その眼はただひたすらに前しか見ていない。

5球目のフォークが渾身の空振りとともにミットに吸い込まれた瞬間、彼は膝から崩れ落ち、遠くからでも分かるぐらい大きな声で泣いた。無情なサイレンの音。

さあ、午後も仕事だ。

2010/8/15

遠くから花火の音が聞こえる。正確に言うと、低い断続的な響きだ。
一人で花火大会に行く気にはなれない夜、僕は家で耳を澄ませている。
今年は都合が付かなかったあの娘は、また何かの折にどこかに誘ってみよう。
来年こそは、なんて悠長な台詞は、今の僕には似合わない気がするんだ。

2010/8/16

夜中だというのにまだ随分寝苦しい。扇風機を回して、深く息を吐く。
目を閉じると、さっきの夢の続きが始まる。もう顔も思い出せない、昔愛した女性の夢が。
落ちてゆく意識とともに、音も色も闇に溶けていく。
ただその雰囲気だけが、彼女を思い出させる

2010/8/16

今年は忙しかったから、もう夏は終わってしまったね。

今日、少し気の早いすすきを見つけて、窓縁に飾ってみたの。

開け放った窓から涼しい夜風が流れてくる。

今夜、あなたは早いから、仕舞いかけていた浴衣に二人で袖を通し、畳の上でお酒を少し頂くの
。

2010/8/16

社会人の夏休みは短い。

日ごろ被っている「サラリーマン」という仮面を脱ぎ捨てて、柄にもないことをして遊んでみる。

三十路を前にして疲れは抜けなくなったけれど、

独身貴族を気取りながら、唯一のとりえの真面目さを捨てて街に出る。

今夜出会う人たちは、俺を知らない人たちだ。

2010/8/16

魔法のカレンダー、一年に一度だけしか使えないけれど、その効果は絶対だ。
僕は去年、八月十六日に丸をつけたから、別れた人の誕生日を僕が迎えることはもうない。
幸せな、そして悲しい思い出を日付とともに消す度に、僕はまた一つ歳をとり、僕の時間は加速してゆく。

2010/8/17

墜落した衛星から出てきた、四角い岩の海岸と青い海の写真は、
この星の人々にとって初めて見る地球の光景だ。
辺鄙な星に不時着してより三世紀、彼らは文明を失い、書かれた文字の意味を知ることはない。
人々は赤茶けた空を仰ぎ、感謝の祈りを続ける。
今はなき、地球におわす神に。

2010/8/30

偶然かそれともわざとか、わが家に猫が上がりこんできて早二日。

首輪付きだからどこかの家の猫なんだろうけど、肝心なことを教えてくれないから分からずにいる。

誰かの声がする家というのも悪くはないが、別段何かをしようという気にもならない。

どうやら彼女は家事も出来るらしい。

2010/8/31

逃げ水の彼方からゆらゆらと近づいてくるトラックに、右手の親指を立てる。
麦藁帽子の下の顔は、高地独特の容赦ない照り返しに灼かれている。
熱帯夜も思い出になり、草原にはススキが少しずつ目立ち始めている。
遥か山を越えた場所に三角錘の入道雲。あの方向に、僕の帰る街がある。

2010/8/31

君の姿はもう浮かばないけれど、君の残した言葉は僕をまだ的確に言い表している。
どれだけ忘れようとしても、僕の一部になってしまったそれらは消えることがない。
果たして僕の言葉は君の中に少しでも残っているのだろうか。
近づいても交わることはなかった二つの人生の証として。

2010/8/31

緩やかに左へカーブする海岸線に、緋色の太陽が沈んでゆく。

写真には残せない繊細な色彩がより一層深みを増す。

さっきまで波打ち際の砂色だった曲線がオレンジ色の光の破線に変わる頃、
僕は君の事を考えていた。

この景色を見た時の君の表情と、逆光に浮かぶ横顔が見たかったんだ。

2010/8/31

山のあなたに陽は沈む。
夏の思い出連れに、
入道雲が燃えている。
東を見ればうろこ雲、
明日は九月だ、秋が来る。

2010/8/31

「どうしたの」

「あ、元気かなと思って」

不器用な僕は気の利いた一言が続けられない。

「そう」

君は修辞法なんか使わない。

受話器からは君の性格そのままな、でも穏やかな声がある。

無言と短い会話を繰り返すうち、少しずつ鼓動が収まる。

君の声が、見えぬ笑顔が、僕を満たしてゆく。

2010/8/31

さしても渴いていない喉にビールを流し込む。

苦味がかえって心地良く、つまりはこれが大人になって覚えた「とりあえず」という味だ。

誰もいない部屋に「お疲れ様」と呟いた。

返ってくる言葉もないけれど、これが最近覚えた日常という光景だ。

二日に一本、日常は積み重なってゆく。

2010/9/1

上を向くと、今日も蛍光灯の明かりが見える。

外にも出ず冷房の効いた室内で過ごす昼休み、代わり映えのない日常に突然飛び込んだメール。

最近久々に会っている後輩からの何気ない一言だったけれど、

僕は手帳を確認し深呼吸、携帯に向かった。

「ところで、週末お時間ありますか？」

2010/9/6

何となく駄目だろうとは思いつつ、ふと僕の気持ちを素直に伝えてみた。
変な話だけれどそれは、君がどんな断り方をするか興味があったから。
そしてそれもきっと「好き」という感情なんだろうと気づいたからだ。
今、君らしい「ごめんなさい」を聞けて、僕は不思議と満足している。

2010/9/7

狭いとはいえここは天下の往来、なのに夜中になると大の字に寝る猫の姿がちらほら。
そうか、君たちのうちの誰かが、僕の車のボンネットに雀を飾ってくれたんだね。
散歩中の犬に追い立てられても、迷惑そうな顔でゆったり室外機に飛び移るその影は、
まさに僕が昔欲した自由そのもの。

2010/9/8

今年の夏は暑くて、だけど実に淡々と過ぎていった。
募る私の想いとは裏腹に、あなたは結局戻らなかった。
時折掛かってくる電話の遠い音に、1万キロという距離が生々しい。
受話器の向こう、あなたはいつも謝ってばかり。
でも私は遥かなその声で、こんな日々を忘れることが出来るの。

2010/9/8

不思議なもので、君との思い出には「秋」という季節がない。
僕のせいだったり、はたまた君が理由だったり。
毎年、秋が来るたびに僕は切なく、壊れそうな心を抱えていた。
そう、四季はとても儂く、美しかった。

もう、何年も前の話。
今の僕には出来すぎた物語のように思えてならない。

2010/9/8

嵐の日には外に出たくなる。
幼い頃読んだ本の挿絵の様な光景を、私は今も探している。
「私の日常総てが壊れてしまえば、ゼロからやり直せる」
そんな衝動に駆られて。

でも私は、もう大人。
失くしたいものは増えるばかり。
ただ、最近気づいたの。失くしてはいけないものもあることに。

2010/9/9

熱帯夜が終わった。あまりにも心地よくて、ゆっくり眠ってしまった。
一度目が醒めたけれど、またすぐに意識は闇の中へ。
フレックス入社であることの幸せを噛み締めながら、
薄汚れた部屋の中で秋の始まりを感じていた。
夏に慣れきった躰は、またこうして寒さを覚え、次の夏を迎える。

のんぷいく ～此方～

2010/8/24

蒸留酒で喉を灼きながら、死んだ人間を振り返る。

あの舞台は、志というものを教えてくれた先輩に観てもらいたかった。

人を笑わせる、そんな場が無事ハネたというのに、心は一層曇るばかり。

そして、そんな思いを聞いてもらえる人もいない。ただ、マルボロがチリチリと煙を上げている

。